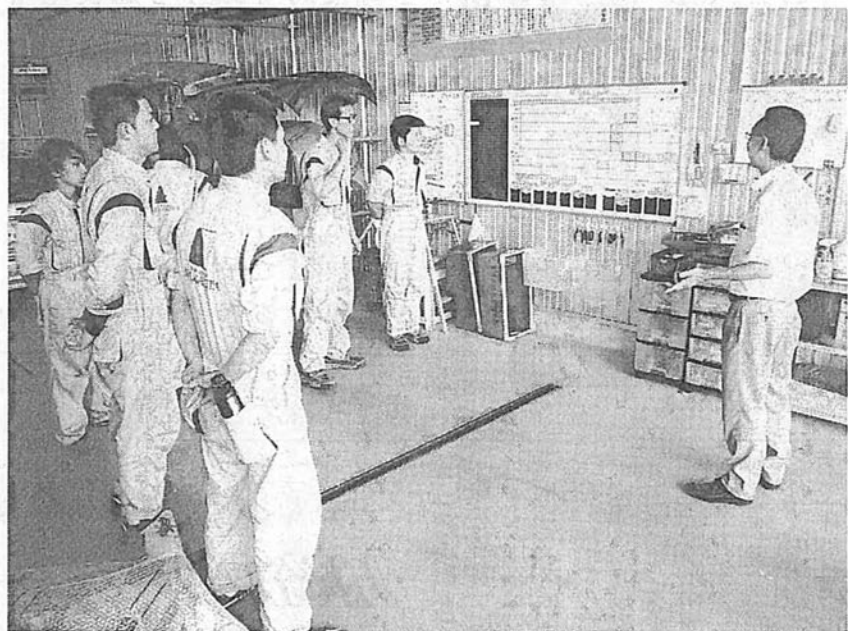




おしゃれできれいな外観



板金・塗装部門が連携をはかるミーティング

現場のアイデア

あの手 この手

水性塗料に完全移行
板金と塗装部門連携

売上高の80%以上を占める板金塗装については、月間平均入庫台数が65台で、乗用車から大型車までカバーする。このうちDRPからの入庫比率が40%、ディーラーからの委託入庫が40%、一般入庫が20%で、近年はDRPを始めとする直需の入庫比率が高まりつつある。

同社の大きな特徴は、入庫車両に水性塗料を100%使用している点だ。通常、溶剤型塗料と話す。また同社の塗装部門の

自前のカラーベースは財産

中北社長は「水性塗料導入にあたっては、塗装スタッフの取り組みだけではうまくいかなかった。板金スタッフの理解を得て始めて成功する。加えて、塗料メーカーによる研修をスタッフに積極的に受講してもらう体制を整えるなど、経営者の理解も必要だろう。塗料販売店・塗料メーカーのサポート体制がしっかりしているか否かも重要だ」と話す。

オートサービス中北

(愛知県一宮市)



中北社長

ミーティングで作業内容を共有

から水性塗料への完全移行は容易でないと言われるが、同社は板金部門と塗装部門の連携を強化したことで水性への完全移行を成功させた。具体的な取り組みとして、毎日朝、昼、晩の3回にわたり、板金と塗装両部門のスタッフが一堂にミーティングを行い、各スタッフの作業内容を全員で共有している。ミーティングを通じて作業の無駄をなくすことで残業を減らしている。日々のこうした取り組みが水性塗料への完全移行にも生きた。

清潔感あふれる工場運営



責任者を務める熊沢崇氏は「水性塗料は作業時間が溶剤系に比べ長いとされるが、板金部門のスタッフも塗装を手伝える連携体制を整えておけば、工程全体での効率を下げずに済む。慣れれば水性使用率100%でも問題は無い」と話す。

00枚以上に達する。また調色室をあえて設けずオープンスペースとすることで作業性を高めている。「大量の自前のカラーベースは当社の財産だ。これを増やすほどに調色効率が高まり、浮いた時間を他に作業に回せる」と(熊沢氏)。

「職人気質」偏重からの脱却へ

同社スタッフは異業種出身者が大半を占める。「職人気質」偏重からの脱却を目的に同業者からの採用を控える同社は、新人教育でデータ化した塗装研修の採用や実車を重視した研修を通じて、効率的な人材育成を行っている。

学校の近くに位置する同社は、水性塗料導入で環境面に配慮するのに加え、工場全体が見渡せるオープンな作りになっている。同業他社からの見学者に加え、地元の中学校在洗車やタイヤ交換などの職場体験学習に毎年工場訪問する。

〈記者の目〉

水性塗料導入を始め、作業環境の改善には板金、塗装両部門の連携が常に不可欠であることを強く意識している。部門間の垣根を無くして「工場全体で1台を仕上げる」姿勢の共有が、工程全体の効率向上とこれに伴う利益率向上という好循環を生み出している。

(長谷部 万人)